

空気に溺れる

「ご飯食べた?」「着替えてー」「急いでー」。朝はいつもドタバタだ。

7時半に家を出て、4歳の娘を保育園へ送り、大急ぎでフルタイムの仕事に向かう。

ある朝、その日常に異変が起こった。

「ご飯食べた?」「着替えてー」「急いでー」。いつも通り声をかける私の目からは涙がこぼれていた。わずかに驚いた表情を見せた娘が「ママどうしたの?」と訊く。誤魔化すためハグをしようとする私の手を、娘はサッと振り払い、私の目を真っ直ぐ見て、「ママ、なみだはね、おこってるか、かなしいか、こまってるかのどれかなんだよ」と言い、ピンとたてた小さな3本の指を私の顔の前に出して「ママはどれ?」と訊いてきた。

私はハッとした。

長引くコロナで、ピンと張りつめた会社の空気、保育園の登園自粛の空気、気分転換だった同僚とのランチは黙食。さらに、私のコロナの罹患により、復職後、廊下ですれ違いざまに話すことさえ憚られる空気。

私は、社会の空気に呑み込まれ、息ができなくなり、溺れそうで「困って」いたのだ。

おそらく保育園の先生が教えてくれたであろうこのシンプルな涙の理由に、私は肺に一気に空気が入り込むような感覚に見舞われた。

「お母さん、困っているみたい。」そう言うと「ママはこまってないてるんだね。」と娘。理由を知り満足した娘は、クルッと私に背を向け、鼻歌混じりに保育園の支度を再開した。私はその後ろ姿を見ながら、薄暗い曇り空のような視野が明るくひらけるのを感じた。

会社には休職を願い出た。

今、私は夏の強い日差しの中にいる。無邪気にはしゃぐ娘とひとときの休息の日々を過ごしている。先はまだ見えていない。でも大丈夫。キラキラと眩しい水平線、青く高い空、娘の屈託のない笑顔を見て、私は心からの愛顔でいられているのだ。

私は呼吸できている。